未来へつなぐ　第52回

田んぼの楽しさ！
農業の魅力を伝える

「田植え体験学習」で説明をする佐藤会長（右）

佐藤　剛信　さん（さとう　たかのぶ）
留萌市食農教育推進協議会　会長

　農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

　今回は「わが村は美しく－北海道」運動第８回コンクールで優秀賞を受賞した「留萌市食農教育推進協議会」会長の佐藤剛信さんにお話を伺いました。

≪子どものうちから地元の米を知ってもらう≫

　留萌市は、北海道北西部に位置して水産加工を基幹産業とし、「塩数の子」の生産量は国内シェア50％を占めています。農業もトップクラスの高品質米を生産し「全国米・食味分析コンクール」で３年連続金賞を受賞しています。その「留萌米」の魅力を地域内外に発信するためさまざまな活動をしているのが、留萌市食農教育推進協議会です。

　はじまりは、協議会の前身にあたる農村青年グループの４Ｈクラブ「五志道（こしどう）」に、市内の小学校から総合学習のカリキュラムで農業体験の依頼があり、田んぼの見学会を実施したのがきっかけでした。そのときに行ったアンケートでは、ほとんどの子どもたちが留萌でお米を作っていることや品質が良くて美味しいことを知りませんでした。そのことに危機感を覚えたメンバーたちが、子どものうちから地元の米や農業を知ってもらえたらと、2010年「留萌市食農教育推進協議会」を設立。本格的に活動をスタートさせます。

2024年に行われた「田植え体験学習（上）」「稲刈り体験学習（下）」

≪体験学習でお米の大切さを知る≫

　主な活動は、６月と10月の年２回、留萌市内の小学校５年生を対象に、「田植え体験学習」「稲刈り体験学習」を開催しています。

　６月の田植えでは、最初のうち子どもたちは田んぼの感触に戸惑いながら田植えをしていますが、最終的には、みんな楽しそうに笑顔を見せて体験しています。10月の稲刈りでは、鎌を使って稲を収穫し脱穀（だっこく）します。子どもたちは、自分たちが植えた小さな苗が大きくなって食べられるまで成長することで、普段食べているお米を育てる大変さや大切さを知ります。

　ほかにも協議会では、子どもたちが頑張ってくれた活動を留萌の人たちにも知ってもらいたいと、参加した小学生全員に体験した絵を描いてもらい、市内の公共施設に展示する「児童農村絵画コンテスト」を実施しています。その中で優秀な絵画と子どもたち全員の集合写真を載せたオリジナルの食育米100袋を販売しています。

子どもたちの絵画（左）と集合写真（右）を載せたオリジナルの食育米

　当初は、６校が参加していた体験学習も少子化の影響で２校が廃校になり、現在４校になっています。子どもたちも減って田植えや稲刈り体験の作業にも時間がかかっています。農村地域も担い手不足は深刻な現状ですが、体験学習をすることで子どもたちに地元のお米や農村の魅力を知ってもらい、将来的に少しでも農業に携わってもらえたらいいと、協議会は今後も活動を続けていきます。

当協会ホームページ、「わが村は美しく－北海道」運動第１～９回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。